

大学院の共通科目について

佐久間 淳 一

学務委員会委員長

今回のワークショップでは、今年度、学務委員会が中心になって議論を重ねてきた大学院の共通科目について、意見交換を行った。

まず、最初に、学務委員会委員長の佐久間から、大学院共通科目に関わるこれまでの経緯と今年度の検討結果の報告があった。次に、これまで実際に開講されてきた数少ない共通科目である「歴史研究のための調査方法論」について、担当者である周藤から、開講に至った経緯、現状、課題等の説明があった。引き続き、出席者による意見交換を行った。

1. 大学院共通科目設定の経緯と現状

大学院共通科目は、大学院重点化の際に文学研究科が一専攻となったことに伴い、全体で1つの専攻であることの裏づけとして、2000年度に導入された科目である。下記のとおり、研究科全体に対する共通科目とコース別の共通科目がそれぞれ設定されている。

研究科共通	総合人文学	講義
	人文学先端研究	講義
	人文学先端研究	演習
	人文学実践研究	演習
総合人文学コース	多元文化論	演習
基層人間学コース	文明基礎論	演習
	科学基礎論	講義
	言語研究法	演習
歴史文化学コース	広域歴史学	演習
	史学方法論	演習
	歴史資料学	講義又は演習
	文化財学	講義又は演習
文芸言語学コース	表象・記号論	講義
	文芸批評論	演習
	比較文学論	演習

なお、2000年当時は環境学研究科が発足していなかったため、環境行動学コースの共通科目として、「環

境行動学研究 講義又は演習」と「社会行動学研究 講義又は演習」も開設されていた。

これらの共通科目に対して、実際に開講された共通科目は以下のとおりである。

◎2000年度

人文学実践研究	香川知晶講師	生命倫理学研究
人文学実践研究	高野春廣講師	現代マスコミ論
人文学実践研究	神谷 浩講師	博物館学芸員の諸問題
文明基礎論	金山 教授	古代ギリシアにおける「説得」
広域歴史学	吉武 助教授	近代化とナショナリズム
	若尾 教授	
	羽賀 教授	
史学方法論	川田 稔教授	歴史研究のための調査方法論
	周藤 助教授	
	加藤 助教授	
	東村岳史助教授	

◎2001年度

人文学実践研究	香川知晶講師	生命倫理学とは何か
人文学実践研究	松田素二講師	異文化理解の可能性
人文学実践研究	櫛笥節男講師	書誌学実践研究
広域歴史学	若尾 教授	近代化とナショナリズム
	羽賀 教授	
	川田 稔教授	
史学方法論	周藤 助教授	歴史研究のための調査方法論
	加藤 助教授	
	東村岳史助教授	

◎2002年度

人文学実践研究	倉持 武講師	生命倫理学の諸問題
人文学実践研究	窪田由紀講師	ジェンダー論
人文学実践研究	山脇一夫講師	博物館・美術館実践研究

広域歴史学	若尾 教授 羽賀 教授 川田 稔教授	近代化とナショナリズム
史学方法論	周藤 助教授 加藤 助教授 東村岳史助教授	歴史研究のための調査方法論

◎2003年度

人文学実践研究	倉持 武講師	先端医療の諸問題
人文学実践研究	木本貴美子講師	ジェンダー論
人文学実践研究	北谷正雄講師	博物館実践研究
広域歴史学	若尾 教授 羽賀 教授	近代化とナショナリズム
史学方法論	周藤 助教授 加藤 助教授 東村岳史助教授	歴史研究のための調査方法論

2004年度

史学方法論	周藤 助教授 加藤 助教授 東村岳史助教授	歴史研究のための調査方法論
-------	-----------------------------	---------------

2005年度

史学方法論	周藤 教授 加藤 助教授 東村岳史助教授	歴史研究のための調査方法論
-------	----------------------------	---------------

2006年度

史学方法論	周藤 教授 加藤 助教授 東村岳史助教授	歴史研究のための調査方法論
-------	----------------------------	---------------

上記のうち、研究科全体の共通科目「人文学実践研究」は、大学院生に人文学と社会の関わりに目を向けさせるという点で一定の効果があつたが、一方、すべての授業が非常勤講師に担われている点に問題があつた。また、開講科目が人文学実践研究に偏っていることも問題であつた。さらに、2004年度以降は開講さえされていない。

一方、コース別の共通科目は、初年度こそ3つの授業が開講されたが、年を経るごとに減少していき、今年度は1つだけしか開講されていない。また、これまでに開講された授業のほとんどが歴史文化学コースの共通科目であり、一度も共通科目を開講していないコースもある。

2. 今年度の検討結果

文学研究科規程に規定されながら、半数以上の共通科目が一度も開講されることなく現在に至っている現

状は、明らかに不適切であろう。学部と大学院にまたがるカリキュラムを考え、コースツリーを設定すると、大学院の共通科目は大学院教育の入り口に位置づけられる。その意味でも共通科目は重要であるし、また、文学研究科は多様な学問領域を抱えているため、ともすれば各専門が蝸壺的に研究・教育を行っていて全体としてのまとまりがないとの批判があるが、そうした批判に答えるためにも、何らかの形で共通科目を実施する必要がある。とはいえ、これまで開講されてこなかったのは何らかの理由があつたからで、共通科目の開講にこぎつけるためには、共通科目の理念を再検討すると共に、実現可能性も踏まえた計画を立てなければならない。そこで、学務委員会の元に「文学研究科共通コア科目の開発研究WG」を設置し、共通科目の理念の再検討と実施計画の立案を願うこととした。WGの委員は、山田教授（主査）、天野教授、滝川教授、高橋晋也助教授、加藤久美子助教授、佐々木助教授、畝部助教授の計7名である。

3回の会議を経て、7月20日に検討結果がWGから学務委員会に報告された。報告の内容は次の3点にまとめられる。第一に、研究科共通授業については、①研究者倫理、企業倫理、②海外留学、③海外の大学院事情、④企業が求める人材、⑤教授法、⑥セクハラ防止のような、一般性が高くかつ重要なテーマを内容として、計15回の授業を開講する。第二に、コース別共通授業については、各コース内の専門が開講している授業の中から他の専門の学生にも開放可能な授業を選び、それを共通科目に改めて、各コース4つ程度の授業を開講する。第三に、共通科目は、研究科共通の授業2単位とコース別共通授業2単位の計4単位を博士前期課程の必修単位とする。

WGの報告を受けて、学務委員会では2回（7月27日、9月5日）にわたりその案を検討し、その結果を9月6日の教授会で報告した。同日の教授会では、研究室の事情がそれぞれ違う中で、WGの報告にあるような研究科共通授業を実施することに対して、強い異議が出された。そのため、再度9月19日の学務委員会で検討したところ、研究科共通の授業については、教授会での意見もあり、また、WGの提案では高等教育研究センターなどに講師を学内アウトソーシングすることが謳われているが、講師を毎年継続的に確保できるかどうか懸念があること、そのような形式の場合、授業としての一体性を保持することが難しいことなどから、新たな案を考えることとした。一方、コース別の共通科目については、各専門が現在開講してい

る科目の一部を共通科目に読み替えて実施することとした。また、これらの科目は必修とはしないが、履修モデルに位置づけることで学生に履修を促すこととした。

その後、10月4日の総務委員会および10月5日の学務委員会で、研究科共通授業の新たな案について協議した結果、教員の負担を増やさずに、かつ共通授業にふさわしい授業を直ちに開講することは難しいということになり、とりあえず来年度に向けては、重見助教授、鎌田講師が担当している授業を、内容を多少改めた上で研究科共通科目として開講すること、「魅力ある大学院教育」イニシアティブの人文フィールドワーカー養成コースで開講される授業の一部を、コース外の学生が受講する場合に研究科共通科目に読み替えることとした。コース別の共通科目については、10月19日、11月2日の学務委員会の協議を経て、各専門が開講している科目の一部を共通科目に移行することとし、どの科目を移行するかは各コース内の協議によることとした。履修方法については、共通科目自体の履修は必修としないものの、共通科目の履修を促す意味で、文学研究科規程第5条を改正し、共通科目を4単位まで各専門の必修単位の一部に含めることができるようにすることとした。

3. 今後の課題

以上のような検討経緯および各コース内の協議に基づき、2007年度には下記のような共通科目が開講されることとなった（人文学フィールドワーカー養成プログラムの授業は除く）。

総合人文学	重見助教授	ハイパーテキスト序論
総合人文学	重見助教授	テキスト学演習
総合人文学	鎌田講師	近代フランスの文学と文化
多元文化論	阿部教授	「西行」の領域※
文明基礎論	吉武助教授	ギリシア語文法
文明基礎論	高畑時子講師	ラテン語文法
人間基礎論	金山教授	セクストス・エンペイリコス研究
言語研究法	佐久間助教授	統語論の基本概念※
史学方法論	周藤教授 加藤助教授	歴史研究のための調査方法論

歴史資料学	古尾谷助教授 梶原講師	古代の遺跡と文献資料
文化財学	山本教授	文化財学の諸問題
文芸批評論	滝川教授	英米文学研究法※
比較文化論	宮地講師	日本語文法研究の視点※
人文学先端研究	周藤教授	物質文化論演習
人文学先端研究	周藤教授	古代ギリシア研究とフィールドワーク

※は専門と同時開講、人文学先端研究は「フィールド人文学基礎論/応用論」の読替。

開講される共通科目の数という点では進歩があったと言えるが、課題も残されている。最大の課題は研究科共通科目の開発であろう。重見助教授と鎌田講師担当の授業を共通科目に位置づけたのは窮余の策に過ぎず、共通科目としてどのような授業がふさわしいかという議論は未だ尽くされていない。この点は、今後も検討していく必要があるが、近年の業務の繁忙化により、共通科目として望ましい授業を構想したとしても、それを継続的に実施することが人員的に難しいことも考慮しなければならない。一方、コース別共通科目についても、やはり人員の問題で、専門の科目から共通科目へ完全に移行することができず、多くの科目が専門科目と同時開講になってしまっている。同一研究科内での同時開講という形態はやはり望ましいことではない。また、共通科目に移行した科目についても、移行が単なる名目ではなく、共通科目としての実質があることを点検しなければならないが、そのためには、そもそもコース別の共通科目がいかなるものであるべきかについて、さらに議論を深める必要があるだろう。全体として、今回の改革の結果は、学生の側から見てわかりにくいものに終わってしまったことは否めない。改革の趣旨をガイダンス等の場で説明し、周知すると共に、今後一層の改善を図る必要があるだろう。

4. 共通科目「歴史研究のための調査方法論」とその変遷

この科目は、文学研究科の授業科目に共通科目が設定されて以来、唯一毎年開講されてきた授業であるが、授業自体はその前年の1999年度に開設されている。開設に至った背景には、大学院生同士が研究成果

を発表しあう場がないことへの危機感があり、昼夜開講制の導入によって夜間授業の開講が求められたこともあって、隔週木曜日の6限7限に開講することとなった。担当者は、西洋史学の周藤、東洋史学の加藤、国際開発研究科の東村岳史で、さまざまな調査方法の相互批判や検討を通じて、大学院生による調査の実現を支援することを目標とした授業である。

当初は国際開発研究科が発足間もなかったこともあり、国際開発研究科の学生が中心で、文学研究科の学生は少なかったが、具体的なフィールドワークの方法をめぐって実質的な議論を実現することができた。文学研究科からは、夜間授業ということもあって、一時期は社会人学生の参加が多かったものの、その後は減少に転じ、また、国際開発研究科の学生も減少した。授業内容も、調査方法の検討よりは論文執筆支援に重点が移っている。

この授業の開講の意義としては、学生が他専門の学生にも自分の研究を説明できるようになったこと、自己の研究方法について客観的な視点から不断に見直しを行うことができるようになったこと、さまざまな研究方法に触れることで、自己の研究の射程を拡大することができたことなどが挙げられるが、その一方で、論文執筆支援に重点が置かれている現状では、果たしてこれを共通科目と呼べるかどうかという問題もある。

5. 意見交換

さまざまな意見の中で、主な論点は以下のようにまとめることができるだろう。

①そもそも共通科目は必要なのか。

コースツリーとの関係で、共通科目は大学院教育の導入に位置づけることができる。名大出身者と他大学出身者で学力差があることは事実で、語学力など基礎的な力をつけるために、導入教育を行う必要があるという意見がある一方、コースツリーという場合の「コース」は各専門の教育課程を意味するのであるから、研究科共通の共通科目やコース別の共通科目を設ける必要はなく、導入教育が必要ならば各専門が必要に応じて開設すればよいのではないかと意見も出された。他方、文学研究科は全体で一専攻なのだから、それを担保するためにも何らかの共通科目を設定すべきだという意見もあった。

②共通科目に対して学生側のニーズはあるのか。

学生は専門の授業をこなすのに精一杯だし、また他専門の授業を受けるという雰囲気になっていないので、ニーズがあるかどうか疑わしいとの意見もあったが、そういう雰囲気があるからこそ、他の専門の学生が受講することを想定した授業を行い、異なる専門同士の学生が共に学べる場を用意すべきだとの意見もあった。

③共通科目では何を教え、どのような授業形態で開講すべきか。

共通科目と銘打つからには、どの専門の学生でも必ず知っていなければならないようなことを教える授業でなければならないのは当然だが、具体的に何がそれにあたるのかというと、一概には決められないという意見があった。また、仮にそういう内容が想定できたとしても、毎年開講しているうちにマンネリ化が避けられないのではないかという指摘もあった。人文学講義風の授業をしてはどうかとの提案もあったが、院生の専門分野はさまざまであるため、大勢の院生が興味を持てるような授業を行うことは困難との意見もあった。開講形態としては講義より演習の方がよいという意見がある一方、演習では他の研究室の院生が参加しにくいのではないかと意見もあった。

④共通科目に代わるものはないか。

他の専門の学生と共に学べる場を確保したいというなら、授業という形に限る必要はなく、研究会のような形でも構わないのではないかと意見があった。それに対して、自主参加の研究会では他の専門の学生は出てこないのではないかと意見があった。学生を出てこさせるには授業形式にしなければならないが、研究会を授業として提供することは難しいので、研究会に出席するごとにポイントを付与し、一定以上のポイントによって単位を認定することも考えられるのではないかと意見もあった。一方、そのような複数の専門にまたがる研究会は、むしろ後期課程の学生にこそ必要なのではないかと指摘もあった。この点については、単位制導入の是非を含め、後期課程のカリキュラムのあり方を今後検討していく必要がある。その際、海外の大学のリサーチセミナーのようなものが参考になるのではないかと指摘があった。

⑤その他

共通科目がどういうものであるにせよ、これからも

開講を続け、また同時開講のような正常でない状態を改めて、本来あるべき姿に近づけていこうとするならば、担当者に何らかのインセンティブを与える必要があるのではないかとの意見が出された。そのために、文学研究科プロジェクト経費を活用できないかとの指摘もあった。

6. 成 果

短い時間ではあったが、活発な意見交換がなされ、共通科目をめぐるさまざまな問題が浮き彫りになり、大変有意義な機会であった。共通科目に関しては、理念の問題と実施に当たっての現実的な問題の両面があり、その解決はいずれも容易ではないが、今回のワークショップの結果を踏まえ、今後も検討を継続していきたい。